

23

『艶本房術龍之巻』について

永塚 憲治

公益財団法人研医会

嘉靖十五年刊の房中書である『素女妙論』は、曲直瀬道三の手によって『黄素妙論』として和語に抄訳された。その内容は、江戸時代には艶本に取り入れられ、性に関する養生・医学的な言説の淵源の大きなものとなっている。石上阿希の『日本の春画・艶本研究』（平凡社2015年）で指摘するように、艶本が引くのは、漢文の『素女妙論』ではなく、和語に抄訳された『黄素妙論』である場合が圧倒的に多く、『素女妙論』は間接的な影響を与えていると言える。今回、入手・発見し紹介する艶本「艶本房術龍之巻」は、直接『素女妙論』を見て、和語に翻訳したと考えられるもので、数少ない直接的なものである。まず書誌を述べる。

書型：堅本2冊（半紙本）。表紙：横刷毛目に若松の替え表紙，縦22×15.5cm。本文：四周単辺，17.1×12.9cm，半丁10行，毎行25字前後。構成：第1冊 総13丁，第1冊，挿絵半丁，序一丁，挿絵六丁，以下本文五丁半，第2冊 総13丁半，挿絵7丁半，本文6丁。挿絵：第1冊，首に片面1図，両面6図。第2冊，首に片面1図，両面7図。題箋；あり。ただし白紙。内題 艶本房術龍之巻上（下）。章題 初伝／十動候の伝（以上第1冊）女の動作にて好む所を知る候の法／交接を慎の法（以上第2冊）。尾題：なし。柱題；なし，ノドの丁付けあり。句読なし。署名：なし。画者：不明，勝川派か。刊記：なし。書誌備考：第1冊の丁付は最初が「二」で，挿絵の最後が「十」で本文の第一丁も「十」。画者が勝川派であることから見て年代は，十八世紀中盤から十九世紀初頭にかけてのものか。

この『艶本房術龍之巻』は、「序」に「……其法や精を吸・氣を採の術・按摩閉固の法・精を固めて不泄の傳なり。是根を固めて帯を固むるの術にして此法得る時は一夕に十人の婦女と交て女美快の情を十分ならしめ，男は精を開固一周天一も欠る事なく数百女を交接とも氣力常人の百倍して智慧日々に新にして寿命延長なさしめ疾を去る……」（稿者が句読点を補う）とあり，これは嘉靖十五年の刊記を持つ『素女妙論』（以下，嘉靖十五年刊本と呼称する）の「素女答曰，『凡男女交合之道，吸精・採氣之法，按摩・導引之義。返本還元，深根固蒂，得其長久之情。若非採陰之法，徒勞交合，不得其暢美。……』」（素女答へて曰く，『凡そ男女の交合の道は，吸精・採氣の法，按摩・導引の義なり。本に返り元に還り，根を深くし帯を固めば，其の長久之情を得る。若し採陰の法に非ずんば，交合に徒勞し，其の暢美を得ず。……』）か，或いは丙寅の序を持つ『素女妙論』（以下，丙寅序刊本と呼称する）の「素女答曰，凡男女晟合之道，及補精採氣之法，按摩導引之義。返本還元，深根固蒂，得其長久之情。若非採陰之法，徒勞交合，不得其暢美，終為杳冥。」（素女答へて曰く，『凡そ男女の交合の道，補精・採氣の法，按摩・導引の義に及ぶ。本に返り元に還り，根を深くし帯を固めば，其の長久之情を得。若し採陰の法に非ずんば，交合に徒勞し，其の暢美を得ず，終に杳冥と為る。……』）を見て作成した文と考えられる。なおこれらの『素女妙論』の文は『黄素妙論』には見られない。また『艶本房術龍之巻』の「交接を慎の法」に「聖賢像」とあり，これに対応する文は嘉靖十五年刊本では「聖賢像前」に作り，丙寅序刊本では「及諸神鬼像前」に作ることから見て，『艶本房術龍之巻』は嘉靖十五年刊本の『素女妙論』を見ていたことが分かる。『艶本房術龍之巻』の成立が，十八世紀中盤から十九世紀初頭だとすると，村井敬義の所有の『素女妙論』が塙保己一や太田南畝等によって転写していた時期にあたる。なお『艶本房術龍之巻』は末に続篇の『艶本房術虎之巻』が予告されている。『艶本房術虎之巻』は，未見であるが，その出現を待ちたい。